

# 島の 自立的発展を考える

新田直人

島や半島は定住の地として、はたして条件不利な土地なのだろうか。海や山に囲まれた環境は一見厳しいような印象を与えるが、その自然を活かす知恵がさまざまに生業を育み、海運が華やかかりし時代に繁栄を極めた地域性は外向的な気質をいまに伝えている。海・山・里が同居する暮らしや海を自由に往来する歴史に培われた「複業的な経営」「他地域との交流」に島の可能性を探っていく。

## 半島の

### さらに先にある島々へ

島を旅することが多くなった。きっかけは、前職で半島地域の振興を担当してからである。

平成一七年に半島振興法が二度目の延長を迎えた際、従来からの法目的であった「条件不利性の是正」に、「地域の自立的発展」が加えられた。自立的発展とは何だろうかと考えていたとき、「三方を海に囲まれ、平地に恵まれず、

水資源が乏しい」という、半島の条件不利性を表した言葉が目が行った。なぜ、人々はそのような不利な場所に住んだのだろうか。本当に半島は不利な場所なのだろうか。

そう考えて、「三方が海に面し、目の前に平らかな海路が広がっている」と言い換えてみた。陸の眼で半島をみれば不便な場所であるが、海の眼でみれば、遣唐使の寄港地も、北前船で栄えた港町も、古式捕鯨の拠点も皆、半島が関与している。半島とは、海を自由に行き来し、他地域との交流を前提に生きてきた人々の暮らす場所だったので

ないか。

半島の人たちは進取の気性に富んでいる。平成一五年に能登空港が開港すると、能登半島の人たちは、有志で東京・銀座に居酒屋を作ってしまった。「金沢に飲みに行くより、銀座に行った方が早い」と言いながら、彼らは活発に地域間交流を進めていた。そのような眼で各地の半島を見ていくと、半島は海に開けているだけでなく、海を通じて半島同士も昔から繋がっていることに気づいた。そして、

その交流の輪の中に島も加わっていることを知ると、関心は半島の先にある島に広がった。

### 外に開かれた福江島と小値賀島、相互扶助精神の息づく大島

島というと、閉鎖性、隔絶性といった眼でとらえがちだ。そもそも、「離島」という言葉自体がそうだ。だが、海を通じて交流の歴史によって開かれた島の歴史からいえば、実はオープンな場所だったのでないだろうか。

私は、島を訪れると、農作業や網の手入れをしている住民から、島の話を聞くのを楽しみにしている。島に住む人たちは外交的だ。カメラをぶら下げて歩いて、「何しに来た」という顔をされることはまずない。

五島列島の福江島の荒川港に湧く荒川温泉の共同湯に入ったとき、「○○町 ○○丸」とマジックインキで書かれた風呂桶が番台に並んでいるのを見て驚いたことがある。離島の温泉というと、ゆったりとした時間の流れの中で、お年寄りがのんびりと世間話をしているようなイメージを受ける。

海・山・里が同居する半島の暮らし（石川県輪島市）。





島の人たちで賑わう朝の大島港。

表1 大島(長崎県小値賀町)の人口流動(住民基本台帳)

平成14年 4月1日の 人口	人口の流動						計	平成19年 4月1日の 人口
	H14.4 ~ H15.3	H15.4 ~ H16.3	H16.4 ~ H17.3	H17.4 ~ H18.3	H18.4 ~ H19.3			
100	出生	1	1				2	91
	死亡	3	2		2	1	8	
	転入	5	3	2		4	14	
	転出	5	1	2	8	1	17	

資料：日本離島センター「離島統計年報」

だが、実は、荒川港は五島沖の漁場を目指して集まってくる各地の漁師の拠点であり、共同湯は漁場や漁模様、技術について情報交換が交わされる社交場となっていたのだ。島の漁港は、住民だけのものではない。利用者の半数は、地元外の漁船なのだ。

二度目の五島列島は、小値賀島おぢかじまだった。博多港から夜行の船に乗ると、NPO法人「おぢかアイランドツーリズム協会」が主催するモニターツアーの参加者と乗り合わせた。住民有志と観光協会が設立したこのNPOでは、子どもたちを対象とした農漁家民泊や無人島での自然体験活動などに

に取り組み、平成二〇年度の総収入は一億円、集客数八〇〇〇人泊に及び、一〇名以上の島内外出身の若者を常時雇用しているという。そんな島だから、住民も外交的だった。

小値賀島周辺には、いくつかの付属島がある。その一つ、大島の港で船を待っていると、リヤカーにプロッコリーの段ボール箱を載せた女性たちが集まってきた。聞けば、彼女たちは、民泊の受け入れ農漁家で、都会から来た子どもたちとの交流を楽しそうに語ってくれた。

その話を小値賀の人にとすると、皆、口を揃えて大島の住民は堅実だと言い、「困窮島」の話に及んだ。困窮島とは、大島で最貧の家族を隣の小島に移住させ、自給自足の生活を数年行わせ、自力更生させる制度のことである。この制度は、江戸時代から昭和三八年まで続いたといいい、港には、「自力更生」と彫られた石碑が誇らしげに建っている。大島は人口わずか一〇〇

人の島である。だが、小値賀町で唯一小学校の分校が残り、平成に入ってから土地改良を行い、農業生産も活発に行われている。

島の高齢化率は五〇パーセントを超えているが、過去五年の人口の増減をみると平成一七年度を除けば転入超過となっている(表1)。分校の児童数も四〜七人程度で推移しており、小値賀町の中でもUターンが多く、若い世代が残っている地区である。これは、島の住民に根付く相互扶助と自主努力の精神によるものであろう。困窮島とは、失われた風習を表す民俗学用語ではなく、制度がなくなった今も、島の人々の精神規範として、コミュニティの持続の原動力となっているのである。

### かつては海上交通の要衝だった高見島と佐柳島

もちろん、小値賀島や大島のような例ばかりではない。香川県の多度津町から船で二五分ほどのところにある高見島を訪れたときは、シヨックを受けた。

平地に乏しいこの島では、急斜面に組まれた自然石の石垣の中に瓦葺の民家が並び、町の伝統的建造物群保存地区に指定されている。しかし、三つある集落の一つは一年前



大島港に立つ「自力更生」の碑。

に最後の一人が立ち退き、竹やぶと化していた。そして、中心の浦集落も、上部は無人の境となっていた。急斜面に列なる石段は、車はおろか手押し車も入れない。若者は対岸の多度津町に家を建て、高齢者は海岸の道路沿いの空き家に引っ越した。島からは、鷺羽山の遊園地や瀬戸大橋、造船所などが望め、目の前の海は船が頻繁に行き交う。なぜ古来、交通の要衝であったこの島がかくも寂れてしまったのか。

だが、高見島で出会った男性は、「対岸の多度津町には



対岸に四国本土を望む高見島の浦集落。空き家や荒地が目立つ。

表2 高見島・佐柳島(香川県多度津町)の人口流動(住民基本台帳)

	平成9年 4月1日の人口 (A)	人口の流動 (H9.4~H19.3)		平成19年 4月1日の人口 (B)	B/A
		出生 死亡 転入 転出	3 23 23 79		
高見島	157	出生 死亡 転入 転出	3 23 23 79	81	52%
佐柳島	194	出生 死亡 転入 転出	0 59 52 42	145	75%

資料：日本離島センター「離島統計年報」

がいるからだと言った。また、高見島より沖合にある佐柳島<sup>さなきしま</sup>では、本土に近い高見島と違って島内で結婚した者が多く、近年夫婦で戻ってくる人が多いとも言った。

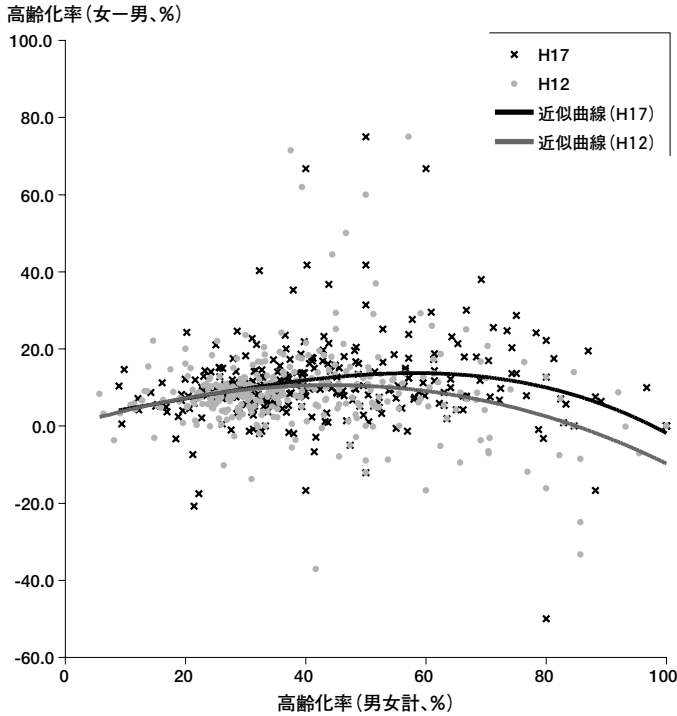
この一〇年間の高見島と佐柳島の人口の流動をみると、高見島は大幅な転出超過により人口が半減しているのに対し、佐柳島は転入者の多さが目立つ(表2)。もちろん、さまざまな要因はあるだろうが、佐柳島は本土から離れた場所に位置していたがゆえに、島の自立性が保たれたとみることもできるだろう。つまり、高見島が衰退したのは絶対的な不利性があったからではなく、町に近く、ただし交通手段が車ではなく船であったためだったのだ。

島出身者が多いし、子どもも遠くて大阪だよ」と言った。彼は、定年退職を機に四〇年ぶりに島に戻ってきた。何とか島が維持されているのは、不動産の流動性があった海岸沿いの家を借りられること(町の不動産屋の広告には、高見島の物件が載っている)、そして彼のように島に戻ってくる人間

### 島々の再生は「複合経営」と「地域間交流」で

図1は、全国の離島を対象に、高齢化率と高齢化率の男女差の相関関係について、平成一二年と一七年(国勢調査)

図1 離島の高齢化率と高齢化率の男女差(平成12年、17年国勢調査)



を比較したものである。これによれば、女性の高齢者比率が男性の高齢者比率を大きく上回っている離島が増加していることが分かる。漁業就業者の八五パーセントを男性が占めることを考えると、このような状態となった漁村では、

主産業である漁業の基盤が一気に失われていくおそれが高い。

漁村の二割は離島、三割は半島に位置する。このため、離島・半島の活力の低下は、漁業の衰退に直結する。漁業を守るためには、基盤となる漁村の振興が不可欠なのだ。

私は、漁村の振興には、「三つの持続性の回復」が必要なのではないかと考えている。まず、村に人が住むという「コミュニティの持続性」、次にその住民が共同で藻場や魚付き林の保全を行うことで、水産資源が守られるという「資源の持続性」、さらにそれにより漁村の基幹産業である漁業経営が安定するという「地域経営の持続性」。そして、経営が成り立つことで人が住み続けることができ、三つの持続性は連関する。

この三つの持続性を確保する上でのキーワードが、島・半島の漁村に歴史的に培われてきた「複業的な経営」「他地域との交流」である。

能登半島の先端にある珠洲市は、金沢まで鉄道で三時間以上を要し、その鉄道も平成一七年に廃止され、過疎化の懸念が高まっていた。しかし、珠洲はもともとさまざまな資源に恵まれた土地であった。沖合漁場に近い日本海と波静



たに石  
「まき落集落」(石巻市)  
をまたわ  
「まき落集落」(石巻市)  
をまたわ  
「まき落集落」(石巻市)  
をまたわ

まれた環境を保全・管理し続ける限り、収入源のいずれかが不変となっても、他の収入で補えるという柔軟性を持っていた。こうした中、近年、農家民泊や農家レストランを開業する農業者が現れ、公共工事の削減の中で新たな活路

かな富山湾の双方に面し、豊かな雑木林からは木炭が採れ、七輪や瓦の製造も行われていた。また、半島の先端ゆえの地域在来種の小豆が残り、大きな河川の流入がないため、製塩業も盛んであった。

それぞれの業は小さく、珠洲の暮らしは、単体の「業」では成り立たない。だが、地域全体としてみれば、季節ごとに海・山・里からもたらされる多様な収入源があった。その恵

を見出そうとする建設事業者が製塩業に参入するなど、海・山・里の資源に同時に恵まれているという希有な条件を活かした取り組みが活発化している。

一つの業にしか携わっていなければ、その業界の掟に従っていけば生きていける。二足のわらじを必要とした地域は、さまざまな情報源と取り引き先を必要とする。それが



対馬の南端、赤米の神事の残る豆蔵(つつ)集落にて。

